



商店街に新しい風と懐かしい笑顔を 神田町マルシェ

◆主催：岐阜市商店街振興組合連合会

4月5日（土）、岐阜の道三まつりと同日に、「神田町マルシェ」が開催されました。岐阜市商店街振興組合連合会 副理事長の青山知憲さんに案内をしていただき、イベントの成り立ちやイベントに対する思いを伺ってきました。



▲神田町マルシェのブース

1. 商店街活動への思いとボランティア精神

「やる人がやればいい」と語る青山さんですが、その裏には深い思いがあります。コーヒー豆の専門店を27年間続ける傍ら、商店街の活動にもボランティアとして力を尽くしています。儲けよりも「正直に、丁寧に、地域に寄り添う」という信念があり、お祭りやイベントの準備に奔走する姿に、周囲からは「どちらが本業？」と驚かれるほど。商店街活動は義務ではなく、「忘れてはいけないこと」として取り組まれています。

2. 商店街という共同体の意義とは

商店街はただの店舗の集まりではなく、地域に暮らす人々の「共同体」です。魚屋さんや肉屋さん、八百屋さん、喫茶店など、それぞれが専門性をもって支え合う、小さな縦長のデパートのような存在です。しかし今は、後継者問題や人手不足が進み、対面の温かみも薄れつつあります。「花が枯れていたら水をやる、汚れていたら掃除をする」——そんな当たり前の意識が、商店街に必要なだと青山さんは語ります。



▲神田町マルシェで購入した卵

3. 神田町マルシェの立ち上げとその思い

そんな青山さんが中心となって始まったのが「神田町マルシェ」です。月に一度、地元の農家さんが直接野菜や果物を販売するこの取り組みは、ただの販売イベントではありません。農家さんの思いが詰まった旬の味を、消費者が対面で受け取ることができる、まさに“地産地消”の場なのです。「派手さはなくとも、地に足のついた

取り組みこそ商店街に必要」と、地元を見つめながら立ち上げられたマルシェなのです。

4. 農家と消費者をつなぐ月一マルシェの展開

マルシェは毎月第3日曜日を基本に開催されています。夏は夕方に「夜市」として行うなど、季節や天候にも柔軟に対応しながら続けています。売り場には農家さん自身が立ち、朝どれの野菜やお米を手渡しで販売。「こんなに安くて新鮮なの？」と驚かれることもあるそうです。また、空き物件の紹介や販路拡大のサポートなど、市商連としても協力体制を整えており、これからの展開にも期待が高まっています。



▲道三まつりと同日開催の神田町マルシェ

5. 地元発信のイベントが持つ本当の力

「本当の意味での地域活性とは、地元の人が地元のために動くこと」と青山さんは言います。イベントは“やった感”ではなく、“続けて意味のあるもの”であることが大切。行政が形だけ関わっても、本当の意味では根付かないと語ります。地域のお祭りにしても、「もっと統一感を持たせたら、ずっと面白くなるのに」との思いも。信長まつりや道三まつりのような大規模イベントも大切ですが、日々の小さな活動が街に根を張ることこそ、本当の意味での地域の力ではないでしょうか。

6. 商店街連携の必要性と岐阜県全体への期待

青山さんは、商店街をもっと元気にしていくためには、地域内でのつながりだけでなく、岐阜県全体との広がりのある連携が大切だとお話し

されています。これまでイベントを通じて築いてきたご縁をもとに、「出張マルシェ」として他の地域へも活動を広げていくことを考えていらっしゃるようです。

また、SNSなどのデジタルだけに頼るのではなく、人と人が直接顔を合わせることで、生まれる信頼や温かさを大切にされています。そのためにも、拠点となるお店や場所をしっかりと整え、日常的に動き続ける仕組みを作っていきたいとのことです。

行政機関との関係も型にはまらず、お互いに歩み寄ることで、スムーズな協力ができればと前向きに考えていらっしゃいます。少人数でも同じ思いを持った仲間と力を合わせて、少しずつ、でも確実に前に進んでいく。そんな姿勢で「神田町ベース（基地）」という新しい形を育てていこうとされています。岐阜県全体が元気になるきっかけとして、これからの展開がとても楽しみです。



▲青山さんの情報発信基地「珈琲屋 さむ」

■ 編集後記～取材を終えて～

神田町マルシェは、地元の農家さんが自ら商品を持ち寄り、お客さまと直接ふれあうことで、安心感や信頼を育むあたたかな場となっています。顔が見える買い物は、単なる“物のやりとり”ではなく、“心の通い合い”を生み出し、地域に小さなつながりを広げてくれます。また、コーヒー店を拠点にした座談会など、商店街全体を巻き込んで意見を出し合うスタイルもとても魅力的です。

こうした取り組みが、岐阜市内の他の地域、更

には他県の商店街にも広がっていけば、地域の活性化に大きな力となるはずです。無理のない規模から始め、地元同士が協力し合いながら、継続的に交流できる場を増やしていくことで、商

店街の新しい形が見えてくるのではないのでしょうか。神田町のような取り組みが、地域と人と未来をつなぐ大切な架け橋になることを願っています。

“楽しさこそ力” ながせ流、やさしさのものづくり市 カワコッチ デラ ナガセ

◆主催：多治見ながせ商店街振興組合

4月19日(土)・20(日)に、多治見ながせ商店街で「カワコッチ デラ ナガセ」が開催されました。2日に亘り現地取材した上で、雑貨店「tekolin(テコリン)」の店主で運営リーダーの渡邊さん、ながせ商店街事務局の松井さんにお話を伺いました。



▲ながせ商店街の玄関口

1. 82年の陶器まつりと響き合う歴史の鼓動

多治見市の春を彩る「陶器まつり」は、今年で82回目を迎えました。通りいっぱいに並ぶ陶器や雑貨の品々は、長い年月を重ねてきた地場産業の誇りそのものです。コロナ明け2年ぶりの開催後に、ながせ商店街としても「春のクラフトフェア」から、「カワコッチ」を取り入れた名称にして仕切り直ししながら歩みを続け、いまや“再出発の象徴”としてのイベントになっています。会場には人があふれ、すれ違うのにも苦労するほどの盛り上がりでした。

2. 「カワコッチ デラ ナガセ」～二つの岸を結ぶ新名所～

今年からイベント名は、“ながせ商店街”が舞

台であることを強調して、「カワコッチ デラ ナガセ」に刷新されました。街の中央を流れる土岐川を基準に、「川のこちら側＝カワコッチ」、そして開催地であるながせ商店街の名を組み合わせた造語です。南岸の陶器まつり会場と北岸の商店街をつなぎ、「川を渡ればもうひとつのお祭りが待っている」というワクワク感を演出します。新名称の「カワコッチ」は当初、何語かわからず調べましたが、地元への愛情が詰まったながせ商店街発の言葉でした。ユニークで、訪れる人の好奇心をくすぐっています。名称の定着は早く、SNSに投稿された写真には、ハッシュタグ「#カワコッチ」が添えられ、すでに次回開催を楽しみにするコメントも多く寄せられています。



▲多くの人でにぎわう会場

3. 手づくりレイアウトで叶える回遊の心地よさ

会場づくりは、商店街スタッフの手仕事です。交通規制をかけた道路にブースを並べ、来場者がぐるりと回遊できる配置を工夫しました。出店希望が年々増え、今年は抽選でお断りするほ

どの人気ぶりでしたが、「箱モノではないからこそ、配置で温かみを出したい」と運営リーダーの渡邊さんは語ります。今年は飲食ブースが二か所に分散されていましたが、来年は一か所にまとめ、人が自然に集い語らえる広場をつくる計画も生まれています。地域の工業高校の生徒たちの出店もあり、若い感性が通りに新しい風を送っています。通り沿いの店舗も軒先を開放し、それぞれの“顔”を生かしたにぎやかな景観が生まれていました。

4.“楽しさこそカ” ～スタッフ哲学が醸す温かな空気～

ながせ商店街の運営スタッフは、「まず自分たちが楽しく」と心に決め、担当を得意分野で分けて合っています。イベントのプロではありませんが、出店者へは冷たいお茶や小さなお菓子を手渡し、来場者には穏やかな声で道案内をするなど、人の温もりを大切に動いています。「苦しいことは続かない、楽しさが巻き込む力になる」と語る姿勢が会場を包み込み、笑顔が笑顔を呼ぶ連鎖を生みました。そうした雰囲気にはひかれて、応募者も年々増加しています。運営メンバーの楽しむ気持ちが、窯の中で溶ける釉薬のように町中へ染みわたり、ながせ全体を温かくと包み込んでいます。



▲参加者の憩いの場である飲食ブース

5.ながせ発・未来へつながる次世代商店街モデル

来場者は県外からも増加し、雑貨やフードが陶器と並ぶ多彩な顔ぶれになりました。以前は夏の催しが花火大会と同時期の開催だったこともあり、日中に水かけ祭りを行い、暑さ対策と遊

び心を両立させた実績もあります。今後はブース数よりも“人が交流できる場所づくり”に重点を置き、装飾で華やかさを高める計画です。さらに多くの人材を巻き込み、運営の輪を広げたいとの声もあがりました。土岐川のゆるやかな流れのように、ながせ商店街は少しずつ商店街を愛する人を巻き込みながら、確かな歩幅で未来へ進んでいきます。



▲特設会場で行われたパフォーマンス

■ 編集後記～取材を終えて～

今回の「カワコッチ デラ ナガセ」は、陶器まつりに雑貨やおいしい食べ物、川沿いの散策を重ねたことで、ながせを訪れる楽しみがぐんと増えました。県外から来られた方は、「また普段の日にも歩いてみたい」と思いやすくなり、日常的なお客さまの流れにつながります。運営を支えたながせ商店街事務局、商店街の皆さん、そして高校生たちが協力してこの催しを作り上げた経験は、これからのお店のサービスや町おこし活動にも役立つ大切な財産になります。高校生ブースのにぎわいは、若い人たちに「ここで挑戦すると応援してもらえる」という安心感を与え、将来のお店づくりや後継者づくりにもつながりそうです。抽選制で選ばれた出店者さんは質が高く、訪れるたびに新しい発見があるので、リピーターも育ちやすくなります。さらに、川をイメージした愛称がSNSで広まりやすく、街の名前そのものがやさしいブランドになります。こうした良い循環が重なり、ながせ商店街は「イベントのときだけにぎわう場所」から、「いつ行っても気持ちよく歩ける、暮らしに寄り添う

街」へと育っていくことでしょう。

柳ヶ瀬から広がる小さな商いの輪～軽トラ市と地域をつなぐ挑戦～ 岐阜軽トラ市／出張輪島朝市

◆主催：岐阜県軽トラ市連合会 ◆共催：岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会

4月26日(土)・27(日)に、岐阜市の柳ヶ瀬商店街で「岐阜軽トラ市／出張輪島朝市」が開催されました。2日に亘り現地取材した上で、岐阜軽トラ市の代表である舩坂さんと、岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会の水野理事長にお話を伺いました。



▲どこまでも続く軽トラックの列

1. 岐阜県軽トラ市連合会の設立と目的

岐阜県では下呂市、中津川市、恵那市を中心に「軽トラ市」が開かれ、これを広げるため「岐阜県軽トラ市連合会」が設立されました。軽トラック1台で始められる小商いを後押しし、特に女性やシニア世代が挑戦しやすい場づくりを目指しています。今後は各市町の取り組みを連携させ、岐阜県全体で広げていく方針です。

2. 生産者と消費者をつなぐ“顔が見える販売”の魅力

軽トラ市の魅力は、生産者とお客さんが直接顔を合わせてやり取りできることです。例えば、農家さんが朝採れた野菜を持ち寄り、育て方やこだわりを伝えながら販売します。

スーパーとは違い、生産者の思いや努力を聞きながら買い物ができるため、安心感とあたた

かさが生まれます。また、軽トラ1台で動けるので、イベント会場や観光地など、さまざまな場所で開催できるのも特徴です。

地域の活性化にもつながり、小さな商いが街に元気を届ける、そんな役割も果たしています。



▲新鮮な野菜・果物を格安価格で購入

3. 岐阜市での出張輪島朝市との合同開催の背景

2025年4月、岐阜市の柳ヶ瀬商店街で「岐阜軽トラ市」と「出張輪島朝市」が合同で開催されることになりました。輪島市は、能登半島地震による火災で朝市の会場を失いましたが、岐阜県軽トラ市連合会が声をかけ、復興支援の思いを込めて共催が実現しました。支援の一環としてクラウドファンディングも実施し、全国から約200万円の支援金が集まりました。このイベントは、単なる一度きりの催しではなく、今後も継続して輪島を支援し、地域同士の絆を育んでいく取り組みです。

また同日、「高橋尚子杯ぎふ清流ハーフマラソン」や、岐阜公園に「岐阜城楽市」が新たにオープンし、柳ヶ瀬の街全体がにぎわいを見せていました。実際に岐阜軽トラ市／出張輪島朝市の会場から、バスで「岐阜城楽市」に移動しましたが、

同じバス停からバスに乗車する方がとても多く、大きな人の流れが生まれていたことを感じることができました。

4. 地域イベントと大学ゼミ活動の融合による相乗効果

今回の合同イベントには、愛知大学や南山大学の学生たちもボランティアとして参加しています。若い世代がイベント運営に関わることで、地域に新たな活力が生まれています。学生たちは、出店サポートやアンケート調査を担当し、地域の課題に実践的に触れる貴重な学びの場となっています。愛知大学では、軽トラ市を通じた地域経済研究、南山大学では柳ヶ瀬商店街の活性化をテーマに取り組んでいます。この若い力の参加によって、軽トラ市や商店街に新しいアイデアがもたらされ、地域の未来につながる取り組みが着実に育っています。

また、学生たちが運営にも関わることで、今後さらに自主的な活動の広がりも期待されています。特に11月には、再び「岐阜軽トラ市」と「出張輪島朝市」の合同開催が計画されており、今回の成功が次へとつながる大きな一歩となりそうです。



▲出張輪島朝市の様子

5. 軽トラ市をきっかけに、柳ヶ瀬商店街に新たな賑わいを

柳ヶ瀬商店街では、今回の軽トラ市誘致を通じて、商店街全体の活性化を目指す強い思いが感じられます。商店街の活性化を考える中で、岐阜城楽市のオープンなどと同時開催することで、より多くの来街者を呼び込み、盛り上げたい

という狙いがありました。水野理事長は「柳ヶ瀬をどんどん開放し、いろんなエリアの良いものを提供できる場にしたい」と語り、以前から物産展のような取り組みを構想していたことも明かされました。また、単発に終わらせず、定期開催していきたいという意欲も示され、町おこしに対する熱い思いがにじんでいました。イベントをきっかけに、柳ヶ瀬の街に新たな賑わいを生み出していこうとする前向きな気持ちを強く感じることができました。



▲買ったその場で焼いて食べられる工夫

■編集後記～取材を終えて～

今回の軽トラ市と出張輪島朝市の合同開催を共催したことで、柳ヶ瀬商店街にとって大きな経営的メリットがあります。イベントをきっかけに多くの人を訪れることで、商店街のにぎわいが生まれ、店舗や地域の魅力を知ってもらう機会になります。それにより、新たなお客様を呼び込むチャンスが広がります。また、地域外からも注目を集めることで、柳ヶ瀬の名前や存在感が高まり、ブランド力の向上にもつながります。更に、若い世代の学生たちがボランティアとして関わることで、商店街に新しいアイデアや活力が生まれ、今後の発展に向けた良い循環が期待できます。

単発で終わらせず、継続的に開催していく仕組みを作ることで、商店街全体の経営の土台を強くしていく効果も見込めます。さまざまな世代や地域の人を巻き込みながら、柳ヶ瀬の新しい未来を切り開こうとしています。

岐阜県商店街だよりは、岐阜県からの補助金を受けています。